

## 剣

伊勢崎市中央町にある落ち着いた雰囲気ワインバー。種類豊富なワインとワインに合わせたフレンチの一品料理が、また、店内に流れるモダンジャズの響きが小室に大人の時間を過ごさせてくれる。

ワインバーの近くの信用金庫に勤務する小室は、よくこの店を接待に利用する。だが、今夜は接待ではない。毎年夏に開かれる中学の同窓会の流れで同期数人と訪れたのである。もっとも今日の同窓会は特別な意味を含んではいたが。

店内にはチック・コリアのピアノソロが響いていた。ウェイトレスが注文を取りに来た。小室は、仲間から各自の好みを聞き出すと、ワインリストからドイツ産の赤ワインとフランス産の白ワインを各2本ずつ選んだ。フレンチは軽いものを、と付け加えて。

ワインとワイングラスがテーブルに並べられると、店の奥からオーナーが出て来た。そして「これは私からです」と言って、スペイン産のスパークリングワインを1本テーブルに置いた。小室が「いいのか？」と訊ねると、オーナーは黙して頷き再び奥へと消えた。オーナーは白いTシャツに濃紺のパンツスーツを合わせていた。髪型は外ハネのグラデーションボブ。身長が高く、また胸が薄いので男のように見えるが女性である。プロのドラマーであり、シンガーでもある。

暫し歓談した後、「宏、大丈夫かしら？ この雨の中、傘も持たず歩いて帰って？」と、テーブルを挟んで小室の正面に座る敦子が誰に言うともなく囁いた。

「大丈夫、もう昔の宏じゃないよ。出版社で編集長までやった男だ」

小室がワイングラスを傾けながらそれに応じた。

「編集長って、経歴が根拠？ 小室君って相変わらず人の気持ちが分からない人ね」

敦子が声を荒らげ顔を少し右に傾け挑むように目を眇めた。

同窓生の晴香がくも膜下出血で倒れ亡くなったのは6月のことだった。小室はその知らせを同窓会長の沢木から聞いたが、家族葬とのことだったので葬儀への出席は遠慮した。また、晴香は独身で一人住まいであったので弔問も叶わなかった。同窓生皆同様であった。

そこで、敦子の提案で、今回の同窓会は「晴香との別れの会」にしようということになった。宏への連絡は沢木がするということであったが、今日の宏の狼狽ぶりからして、沢木は晴香の死を彼に伝えてなかったように思える。

晴香と宏との関係。小室の目にはそれは奇妙な取り合わせに映る。

晴香は頭が良く、中学の中間、期末試験においては、常に学年トップを走っていた。彼女は美人で学力が高く運動神経も抜群だった。まさに「才女」であった。それに比べて宏は容姿も成績も運動も全て平均以下。加えて酷い吃音であった。

「何故晴香は宏を選ぶのか？ 何故美人は吃音を好むのか？ Oh My God! 我が学年の七不思議！」

小室はよく宏を苛めた。気弱な宏が反撃出来ないことを熟知したうえで、徒党を組んで。宏に対する虐めについて、小室は晴香から度々非難された。晴香から回し蹴りを側頭部に受けたこともある。

「見えた！ 晴香のパンツ、真っ白、白オ！」

「おのれ不埒者！ 待てェ、このエロ犬！」

小室は宏を苛めるたびに晴香から逃げ惑うはめとなった。

ところが、晴香と付き合う宏の成績は、徐々にではあるが上昇し、中学3年次後半には県内トップ校と言われるM高校さえ狙える水準となった。

宏の成績が上向いたことで小室は徐々に宏を苛める気力を失った。晴香から追われることもなくなった。

小室と宏はM高校を受験し二人とも合格した。今では、高校の同窓会で顔を合わせれば、歓談する仲となった。宏の吃音も完治している。

傲然たる雷鳴が鳴り響いた。それはワインバーの密閉された空間に地鳴りのように鳴り響いた。店内の照明とともに店内に流れていたチック・コリアのピアノソロも一瞬にして消えた。照明が落ちる瞬間目を睥めた敦子の顔が青白く光った。

だが、照明が落ちていたのは数秒であった。店内に照明が戻り再びピアノソロが流れ始めると、敦子も笑顔に戻ってワインを口に運んでいた。

敦子から小室に電話があったのは今年の3月のことであった。

東財信用金庫本店3階の監事室で書類に目を通してしていると、机上の電話が鳴った。内線番号を確認すると総務部からであった。

「もしもし小室監事ですか？ 1階のロビーに高山様という方がお見えになっているようなのですが……」

女子職員大野のソプラノが小室の耳に響いた。

小室は少しためらってから「すぐ降りて行く」と答え、監事室を出て階段を降りた。小室が少しためらったのは、高山という名に心当たりがなかったからだ。

「何だ、敦子か」

「何だ、敦子かはないでしょう。お客様に向かって」

ロビーには、黒のパンツスーツにグレーのシルクコートに羽織った敦子が、微笑を浮かべ立っていた。男性客をイメージしていた小室は不意打ちを食らった。確かに敦子は本店に預金口座を有している。大切なお客様だ。

ロビーに隣接する応接室に敦子を通すと、女子職員にコーヒーを入れさせ、小室は敦子から来店目的を聴き取った。要は信頼の置ける弁護士を紹介してくれとの依頼であった。先月敦子の息子が交通事故で亡くなり、その示談交渉を弁護士に依頼したいとのことであった。事故現場は東京都狛江市の都道で、敦子の息子は会社からの帰宅途中トラックに撥ねられ死亡したとのことであった。小室はスマホを取り出すと知り合いの弁護士に連絡を取り、概要を伝え、示談交渉の了承を得た。

「小室君って、顔も広いし、仕事も早いのね。さすがね。ありがとう、助かったわ」

小室は敦子をエントランスで見送ると、そのまま3階の監事室に戻った。

高山敦子、旧姓野田敦子。中学の同窓生。小室は腕時計を見た。大野のソプラノを聴いてから席に戻るまでに要した時間、約30分。上出来だな、と呟くと小室は机上の書類を手を取った。書類をめくりながら、少し事務的な応対に過ぎたか。まあ良い、これが俺の流儀だ、と思った。

書類の中に美術館からの招待状が含まれていた。 ～『印象派と戦前近代美術展』～  
「忙しくて行けるわけないだろ」

小室は、舌打ちすると、クロード・モネの「パラソルを差す女」が印刷されたそれをゴミ箱に投げ入れた。

雷鳴はまだ続いていた。だが確実に音は弱まっている。遠くで砲撃戦が行われているかのようだ。

小室は、白いオープンショルダーのトップスに黒いレースのタイトスカートを合わせ、笑顔でワインを口に運ぶ敦子を見て、美しいと思った。息子の死という不幸はあったが、女性として綺麗に年齢を重ねてきたことが見て取れる。重厚な美しさを感じる。そして今は、晴香の死を、親友の死を乗り越えようとしている。

ふと小室は中学時代の部活動のことを思い出した。当時小室も敦子も剣道部に所属していた。男子剣道部と女子剣道部。普段は別れて活動していたが、時折、練習試合と称し、男子と女子が相対し戦うことがあった。 中学3年次の夏休み直前、小室は敦子と対戦した。それは当時の小室にとって世界で最も不運な出来事であった。

3年生から男女各2名、2年生から男女各2名、計8名を選出し、4組の対戦となった。男子剣道部主将を務めていた小室は、最終組で女子剣道部主将の敦子と対戦することになった。

初戦、第2戦、第3戦と進んだが、何れも男子剣道部員の圧勝に終わった。

いよいよ最終戦。小室と敦子は、正座したまま防具を着けると静かに立ち上がり、帯刀したまま3歩で蹲踞が出来る位置まで進んだ。一礼すると二人は3歩進み出て立ち合った。小室は右足を一步出し竹刀を中段に構えた。敦子も同様の構えをしている。その時、面を通して敦子と目が合った。敦子は目を眇めていた。次の瞬間、小室は、彼の右足を踏み込むように身体を寄せてきた敦子に小手を打たれた。小室は手のしびれと痛みのため竹刀を落とした。

「止め！ 野田！」

審判を務める剣道部顧問が右手を上げ敦子に向けた。

小室は茫然自失とし、礼を失し、顧問から注意を受けた。

その後、小室は、男子剣道部員の嘲笑と轟々たる非難の嵐に包まれた。そればかりか小室が敦子に敗れたという事実は、翌日には校内に知れ渡り、「江戸時代の果たし合いだったら、手首を切り落とされ、首をはねられてたんじゃねえかなァ」、「やっぱり最後に悪党は殺られるんだよな。小室のやつ、思い知ったことだろうぜ」、「小室の野郎、頭が良いからって利口ぶって肩で風切っていやがったが。ざまあねえやなァ」等々剣道部員以外からも揶揄されるはめになった。

文政2年、夏、江戸黒門町で道場師範を務める浪人小室慎之介のもとに、藩士橋本宏三郎の妻が来訪した。江戸藩邸で行われる宏三郎との御前試合に負けてくれとの由。宏三郎は藩で剣術指南役の任にあった。慎之介はその願いを頑なに拒んだ。彼は平伏する妻の姿に憐憫の情を抱いたが、「宏三郎様は藩きっての剣の使い手。もし私が手を抜けば、自ずと宏三郎様に知れるであろう。その時なんと思われるか、ご内儀はお考えになったことはおありか。藩録は得ておらぬが私も武士。そのような礼を失するまねはできぬ。勝負は時の運でござる」と言って譲らなかった。

妻が帰った後、その憐憫の情は次第に宏三郎に対する嫉妬に変わった。

藩内の政争に巻き込まれ国元を追われ、妻子を捨て、諸国を流浪し、辛苦の末たどり着いた江戸で道場師範になった我が身。それに比し宏三郎は、下級武士とはいえ藩禄を貪り、あのような律儀な内儀まで得て安寧な日々を身にかけている。

慎之介は憤った。膝が震えた。慎之介はやおら立ち上がると帯刀し庭に降りた。腰を落とし鯉口を切って刀身を抜き出すと、右足を一步前に踏み出し、閃光を感じさせるような鋭さで気合いもろとも仮想敵を切り倒した。

刀身を一旦鞘におさめ再び抜き出し切りつける。慎之介はその動作を繰り返し行った。

門弟たちは何事かと慌てたが、道場の端に歩み寄り、庭で乱舞する慎之介の鬼気迫る剣さばきに見入った。

御前試合は木刀をもって行われた。蟬時雨の中、小室慎之介は橋本宏三郎と立ち合った。慎之介は最初下段に構えたが、上段の構えから打ち込んできた宏三郎を右に交わすと、左から弧を描くように素早く上段に構え直し、向き直った宏三郎の眉間を何の躊躇いもなく一刀両断のもと叩き割った。鮮血が飛び散った。

寸止めをを怠ったことで慎之介は藩主の逆鱗に触れた。だが、体面を重んじた江戸家老のとりなしで咎には問われなかった。過分な口止め料まで得た。

宏三郎の妻は、宏三郎の死を知って狂乱に陥り、その夜自刃した。

宏三郎と妻との間には幼い娘が一人いたが、宏三郎の死を伝えに来た藩士は、妻の狂乱ぶりを目の当たりにし、その幼子の命の危うさを慮って藩邸に連れ帰った。娘は、後日、不憫に思った藩主の命で江戸家老が養女として引き取るようになった。

白装束、白文庫結び、白袴、白鉢巻き姿の武家女が中段の構えから刀剣を打ち込んで来る。

敦子との対戦以降、小室はそんな夢を度々見るようになった。夜中に飛び起きたこともあった。ただ武家女の顔は常にぼんやりとしていて定かではなかった。

小室は敦子を避けるようになった。敦子も同様であった。以前は、部活の愚痴やら何やらよく話したのに。夜空に浮かぶ星々を数えながら帰路を共にしたこともあったのに。二人は、ほとんど口を利かないまま中学を卒業し、別々の高校へと進学した。

「なにボーッとしてるの。……わかった、晴香のこと、考えてるんでしょう？ 小室君は昔から晴香のことを」

敦子が小室にワインボトルを傾けてきた。

「なに言ってるんだ、俺は宏じゃないよ」

小室はワイングラスを差し出した。

小室は、高校時代、一度だけ敦子を見かけたことがある。初夏のことだ。敦子は遮断機の下りた踏切の向こう側で空を見上げていた。セーラー服を着て、右手に鞆を持ち、左手を額の前にかざし目を眇めていた。その姿は小室の目に凜として美しく映った。

電車が通り過ぎ遮断機が上がった。二人は踏切の中央付近ですれ違った。だが、互いに目を合わせることも声を掛け合うこともなかった。

小室は踏切を渡り終えたところで振り返り、敦子の後ろ姿を目で追った。彼女は一度も振り返らなかった。小さくなった後ろ姿が陽炎に揺れていた。その時小室にある感情が沸き立った。小室は「バカだな、俺は」と呟き、その感情を押し殺した。

店内に流れるジャズは、いつの間にかチック・コリアのピアノソロからオーナーの所属するバンドのフュージョンに変わっていた。

「そろそろ雨上がるかしら？ 小室君、帰りはタクシー？」

ワイングラスを傾けながら敦子が問い掛けてきた。

小室はそれには答えず「あのさァ昔、遠い昔、そう高校時代、俺ら踏切ですれ違ったことがあるよなァ。覚えてるかなァ？」と問い返した。

「なによ急に、変な人ねェ。……ええ、覚えてるわ、もちろん。だって**私は……恋……**」

おさまっていたはずの雷鳴が再び鳴り響いた。照明こそ落ちなかったが、それは敦子の甘やかな声を飲み込んだ。